はじめに

国際学部附属多文化公共圏センター長　米　山　正　文

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターは、グローバルな視点からの地域貢献を重要な役割の一つとしてきた。この場合の地域とは国内外を問わない。どちらもグローブ（地球）の一部なのである。

「地域」というと、筆者のような古臭い人間が思い浮かべるのが『万葉集』である。『万葉集』の歌の中には地名が頻繁に登場する。不思議に思って解説書などを読むと、どうやら当時、地名というのは霊威を持っていたらしい。地名には神話（その土地の神様にまつわる話）が込められていたからである。『万葉集』には旅の歌が多いが、旅人は見知らぬ土地に入り込む際に、歌に霊威のある地名を詠み込むことで、その土地の神様に挨拶をし、その土地を無事に通してもらうことを願っていたようである。

こうした話を聞くと、日光開山にまつわる一つの伝説を思い出す。『万葉集』が詠まれたのは主に７世紀～８世紀だが、ほぼ同じ頃の766年、日光は勝道上人によって開山されたといわれている。伝説というのは、上人が激流の大谷川を渡れず、神仏の加護を求めたところ、対岸に深沙大王が現れて二匹の蛇に変身し、さらに橋と化した。その橋のおかげで大谷川を渡ることができ、橋は「蛇橋」と呼ばれ、後に神橋となったというものである。

だが当時、よそ者の勝道上人の力だけで男体山に登頂できたとは到底思われない。土着の人々の助けを得られなければ不可能だったはずである。大谷川の橋の伝説は、そのことを表しているのではないだろうか。日光に伝わる神話によれば、男体山の神（蛇）と、赤城山の神（百足）とで戦いがあったという。これは、それぞれ蛇と百足を信仰する部族がいて、部族同士の争いがあったことを想像させる。蛇が橋となったという逸話と、男体山の蛇との近似も感じざるをえない。対岸に現れ、上人を助けたのは土着の人々の神様だったのではないだろうか。深沙大王というのは、仏教側の観点からの翻案ではないかと思われる。

ところで、神様とは何だろうか。筆者の父方の郷里は、新潟県刈羽郡高柳町（現柏崎市高柳町）という山間の町の、漆島という集落である。夏になると盆踊りが催される神社があったが、名前が表示されていない。父に聞くと、河童を祀ってある社だという。むかし、ある庄屋の家の男が川へ馬を洗いに行った。帰ってきて馬を馬小屋に入れようとしても入ろうとしない。不思議に思って馬屋の入口を見ると桶の下に河童が隠れていた。馬の尾につかまって家の近くまで来たらしい。男はこの妖怪を殺してしまおうと思ったが、河童が「命だけは助けてください。その代わりこの漆島で人の命をとらないことを約束します」と命乞いするので、川へ放してあげた。それから数日間、その庄屋の家には川魚をさした串が毎日届けられた。また、川での事故もめっきり少なくなったという。

折口信夫（歌人・国文学者）によれば、河童とは水の精霊である。この精霊は人畜を水に引きこむ悪行をする。ところが、漆島の河童は（間抜けなことに）馬を引き込むことに失敗し、逆に自分が引っ張りあげられてしまった。通常、ここで人々に懲らしめられるのだが、命を助けられたため、恩返しとして庄屋に食料をもたらすこととなった。かくして悪しき水の精霊は富をもたらす水の神様へと変貌した。河童は、農村集落に恵みをもたらす水への感謝と、

水難から一族（特に子供たち）を守りたいという人々の思いが結晶化したものだと考えられる。

異郷に入り込んだ勝道上人は、その土地の神様に適切に敬意を払い、信仰する人々の魂をおのが身に引きつけることができたのかもしれない。

『多文化公共圏センター年報』も第16号をむかえた。今回の「特集」は「多文化公共圏フォーラムを通じた社会への発信」とした。昨年度から開始したフォーラムに焦点を当て、2023年度にフォーラムを開催された方々に概要や意義について報告をして頂いた。「投稿論文」では６本の論文が寄せられた。「活動報告」は今号から、すべての事業・プロジェクトから報告をして頂くことにした。これまで一部の事業の報告に偏っていたきらいがあったが、センターの活動の全体像が掴めるようになったと思う。また、昨年度より開始された「ワーキング・ペーパー」シリーズの一覧も載せることにした。今後も読者の皆様から忌憚のないご意見等をお寄せいただければ幸いである。

最後に、2019年度より５年間、センターの事務補佐員として業務に関わられた小野寺櫻子氏が、今年度末をもってご退職となった。氏の尽力がなければ、今日のような形でセンターが発展し安定することはなかったであろう。この場をかりて厚く御礼申し上げたい。